

重点をおいたものである。そして、最大の目的は石刃生産であった。

石刃生産に用いられた頁岩には凝灰質な頁岩が用いられていた。その理由の一つは、その原石が持つサイズと質にあったものと考えられる。大型石刃にはガラス質黒色安山岩や安山岩が存在しており、それらの石材と同等な石材適応のあらわれと考えられる。また逆に、大型石刃生産に見合う珪質頁岩原石も存在しているのに、それが行われていない点は、石刃技法における時代的背景を示唆しようか。

2 北方系細石刃石器群における石刃技法構造の位置

(1) 火山灰と放射性炭素年代測定による時間枠

天神小根遺跡で知りうる細石刃石器群の時間枠は、浅間山起源のキーテフラにおける位置関係と2点のAMS法による放射性炭素年代である。

天神小根遺跡の存在する佐久市志賀駒込地方は浅間山の南側に位置することから、同じ志賀地方の西側で降下火山灰の堆積が見られない場所よりは安定的な降下火山灰層があるが、その層厚は薄く浅間山に近い八風山遺跡群と同等な層厚での石器群の位置を確定することが難しい。さらに、天神小根遺跡では堆積後の斜面流失や土石流の影響もあり、整然とした層位での位置決定はできなかった。しかし、そうした条件ではあるが、石器群の検出層位は、放射性炭素年代で16,000年前と推定されている浅間大窪沢第2軽石(As-OK2)よりは上位であり、同様に13,000年前の浅間板鼻黄色軽石(As-YP)より下位であることを石器群の各検出地点で確認している。

2点の放射性炭素年代測定に用いた木炭粒は、ブロック4の南西側拡散部において層位的分布の下部で採取した資料であるが、炭化物集中部のように脈絡をもつ資料群ではなかった。その結果として、1点が $14,780 \pm 80$ 年BP、1点が $13,290 \pm 80$ 年BPという年代値を示した。但し、その年代は浅間大窪沢第2軽石(As-OK2)より上位であり、浅間板鼻黄色軽石(As-YP)より下位であることに整合する。浅間板鼻黄色軽石は、13,000~14,000年前とも推定されており、 $13,290 \pm 80$ 年BPは微妙な解釈となるが、 $14,780 \pm 80$ 年BPは概ね妥当な年代値として一定の評価が与えられようか。

14,000年前という年代は、新潟県荒屋遺跡の北方系細石刃石器群で行われたAMS法放射性炭素年代測定値

天神小根遺跡における大型石刃生産は頁岩4が示すように一連の石核消費において、あるいは頁岩13が示すように石核消費の初期段階で行われ、製品として搬出されたと想定される。

珪質頁岩で行われた石刃の量産は中型石刃である。そのあり方は、中型石刃の搬出と共に、整形石刃核の搬出が想定される。今後、駒込頁岩で製作された石刃の行方を追及するならば、凝灰質な大型石刃(表皮があれば軽石の凝縮部がある)と珪質頁岩の中型石刃とその残核が最有力候補となろう。

$13,700 \pm 80$ 年BP・ $14,100 \pm 100$ 年BP・ $14,200 \pm 110$ 年BP・ $14,150 \pm 110$ 年BP(芹沢・須藤編 2003)と同等である。

(2) 石刃技法構造の地域集団

天神小根遺跡の細石刃石器群を規定する石器製作技術構造を北方系細石刃石器群における石刃技法構造と称したが、その石器群の指標は、細石刃技法によるホロカ技法と石刃技法の存在である。そうした、石器群を天神小根遺跡周辺に求めると、関東山地を越えた北関東地方に一大分布圏を求めることができる。

群馬県を代表する遺跡では、赤城山麓に柏倉芳見沢遺跡と榊形遺跡が存在し、茨城県を代表する遺跡では、額田大宮遺跡と沖餅遺跡が存在する。

柏倉芳見沢遺跡の石器群(萩谷ほか 2005)は、黒色頁岩を用いたホロカ技法による細石刃核と大型石刃を特徴とする。その大型石刃は平坦打面で顕著な頭部調整が施されたものであり、それを素材とする搔器・削器が存在する。そのあり方は天神小根遺跡の基本構造と同等である。ただ、それらの大型石刃の大半は遺跡で製作されたものではなく、製品搬入の状態にある。それは、天神小根遺跡と同等な石刃製作遺跡が黒色頁岩原産地に存在することを意味する。また、ガラス質黒色安山岩や珪質凝灰岩も用いられている。さらに、天神小根遺跡と柏倉芳見沢遺跡の関連として注目できる点は、珪質頁岩(報告書では硬質頁岩)の細形細石刃が1点検出されていることである。黒色頁岩原産地近傍には新潟県の珪質頁岩産地(上野層)が存在するので、駒込頁岩とは断言できないが、柏倉芳見沢遺跡の石材構成が天神小根遺跡に通

じる点を示唆している。

榊形遺跡の石器群（相沢・関谷 1988）は、柏倉芳見沢遺跡と比較すれば、石刃技法の資料群は少なくホロカ技法による細石刃資料群を主体とし、細石刃・細石刃核の石材構成に珪質頁岩が増加するが、基本的な器種・石材構成は同等である。用いられた珪質頁岩は、東北産ではなく駒込頁岩にも通じる関東山地産と思われる。

額田大宮遺跡の石器群（川崎ほか編 1978）は、珪質頁岩を用いたホロカ技法による細石刃核、安山岩（ガラス質黒色安山岩）を用いた大型・中型の石刃を特徴とする。石刃を用いた石器には天神小根遺跡にも存在した典型的な搔器が存在する。報告書から、石刃技法・石刃生産の詳細は知り得ないが、遺跡近傍で採取可能な安山岩原石による大型・中型の石刃生産が集中的に行われている。また、細石刃生産に用いられた珪質頁岩には「田代層産」と「下野－北総回廊（東部高地）外縁部産チョコレート頁岩」があるという（田村 2003）。

沖餅遺跡の石器群（茨城県教育財団 1980）も同様に、ホロカ技法による細石刃核、大型・中型石刃、石刃を用いた搔器・削器を特徴とする。石材は細石刃資料群と石刃資料群双方に珪質頁岩が用いられており、それらは「下野－北総（下野－真壁・稲敷）回廊隣接部近傍において生産された資料の搬入品」（田村 2003）と考えられている。また、ガラス質黒色安山岩を用いた石刃製搔器が検出されている。

以上から、ホロカ技法と石刃技法を製作技術構造とする石器群は、関東山地北部に点在する珪質頁岩原産地・黒色頁岩原産地・ガラス質黒色安山岩原産地において製作遺跡を形成し、北関東地方を遊動領域とする地域集団によって形成された石器群である。という一つの結論が導き出せよう。そして、柏倉芳見沢遺跡・榊形遺跡においても浅間板鼻黄色軽石より下位から石器群が検出されており、天神小根遺跡が示す時間枠が、現在最も検討に耐えうるものと考えられる。ただ、その場合、幾つかの解決しなければならない複雑な課題が残されている。

一つは、北方系細石刃石器群における両面調整技術構造、湧別技法による細石刃石器群との時間的・地域的關係である。1点の測定値からことさらに議論を展開することには問題であろうが、テフラとの位置関係からも荒屋遺跡との前後関係を一概に決することはできない。

北海道地方から進入した両面調整技術構造に時間幅があるとしたならば、北海道地方では両面調整技術構造に

内在していた石刃技法構造が本州地方では地域的に発現されたとしたならば。課題は多い。

さらに、八風山ガラス質黒色安山岩原産地における下茂内遺跡第Ⅱ文化層（近藤 1992）では、16,000年前と推定されている浅間大窪沢第2軽石（As-OK2）より下位で天神小根遺跡の細石刃石器群以前に、大型両面調整石槍（神子柴型石槍）製作技術構造の成立が示され、それが浅間板鼻黄色軽石以降まで継続していたことが八風山Ⅳ遺跡（須藤編 1999）で確認されている。つまり、両面調整技術構造における石槍技法との時間的・地域的な関係も複雑である。また、それを石刃技法の問題に転じれば、神子柴遺跡には両面調整技術構造による石刃技法（両面調整体を石核に打面の極めて小さな湾曲する石刃を剥離する技術）が存在し、天神小根遺跡との関係とは。と言った多様な課題が派生する。

天神小根遺跡における新知見は大いなる成果をもたらしたが、同時に大いなる課題も生んだ。今後の展開を期待されたい。

参考文献

- 相沢忠洋・関谷晃 1988 『赤城山麓の旧石器』講談社。
茨城県教育財団 1980 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 一沖餅遺跡一』
織笠 昭 1983 「細石刃の形態学的一考察」『人間・遺跡・遺物－わが考古学論集1－』77-104頁。
川崎純徳・渡辺明・星山芳樹編 1978 『額田大宮遺跡』那珂町史編纂委員会。
小坂共栄・鷹野智由・北爪牧 1991 「関東山地北西部の第三系（その1）－長野県東部香坂川～内山川流域、特に駒込帯の地質とその地質学的意義について－」『地球科学』45巻3号、43-56頁。
近藤尚義 1992 『下茂内遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書11。
杉原荘介 1954 「青森県金木砂礫層出土の偽石器」『INQUA日本支部連絡誌』7号。
須藤隆司編 1999 『ガラス質黒色安山岩原産地遺跡 八風山遺跡群』佐久市埋蔵文化財調査報告第75集
芹沢長介・須藤隆編 2003 『荒屋遺跡 第2・3次発掘調査報告書』東北大学大学院文学研究科考古学研究室・川口町教育委員会
田村 隆 2003 「林小原子台再訪 一東部関東における長者久保・神子柴石器群一」『考古学Ⅰ』1-51頁。
津島秀章・桜井美枝・井上昌美 2002 「黒色安山岩の採取可能地域 一長野県香坂川流域を中心として一」『研究紀要』20 1-10頁、群馬県埋蔵文化財事業団。
萩谷千明ほか 2005 『柏倉芳見沢遺跡 柏倉落合遺跡』群馬県前橋市教育委員会。